人体改造された青年たちを展示する博物館のお話です。
言うまでもなく閲覧注意。

亀頭のみ（竿切除）・亀頭なし・ローションストッキング責め・自動ミルキング
便器（飲尿）・口オナホ（全抜歯済）・四肢欠損・包茎・亀頭責め・ミルキング・竿あり玉なし・腸内カメラ・極太バイブ・腰振り指導・童貞

読みながらだと気になって集中できないかもしれませんので最初に言っておくと、悪い人はでてきません。みんなイイ人。（だが多分受けの頭は悪い）どんでん返しとかないです。素直な気持ちで読んでください〇

※アナルにフルーツを入れてバイブで潰し、牛乳浣腸をしてグラスに出したものを飲むという描写があります（美味しいヨ）
※約５万文字。全部ハイライトです。
ほぼずーっとエロ。
※四肢欠損がありますので（軽い痛み表現のみで激痛表現はないです・グロもなし）ご注意ください。

人体改造博物館――サンプル――

人体改造博物館。それはネットでも噂にならない、限られた者しか知ることができない場所。

1

（ここかな……）
郵送で送られてきた招待状。その中にあった地図を見ながら辿り着いた場所は一見普通のオフィスビルだった。しかし、招待状に書かれた博物館の住所は地下になっている。
ビルに入り、エレベーターへ。三基あるうちの一番左だけが博物館のある地下へ下りられるという。
（暗証番号……）
特別なキーパッドはない。普段使う階数表示。他に人がいないタイミングで乗り込み、閉めるボタンを押したままの状態で招待状にあった番号を押していく。計十桁。押し終えると、箱はゆっくりと下がり始めた。

「ようこそ」
「あ……」
「招待状をご提示ください」
「あ、はい」
二十代後半――いや、三十代前半だろうか。ピシッと決まったオールバック。顔は百人中百人がイケメンと言うだろうな、というまるで芸能人。その男に封筒ごと渡すと機械にかざされ確認を取られた。
「お待たせ致しました。本日平野様をご案内致します、私諏訪と申します」
「あ、平野です……宜しくお願い致します」
まるで高級ホテルマン。微かな笑みに見惚れてしまう。
「こちらは当館のパンフレットでございます。回る順にご希望はございますか」
「あ……いえ、何も……」
手渡された紙。広げてみると、表には様々な解説、そして裏面は地図になっていた。
「現在おりますのがこちら、出入口と書かれた中央、下の部分です。ここから時計回りに一周回っていただくのがスムーズではございますが」
「ではそれでお願いします」
周りを見ても殆ど人はいなかった。けれど一人につき一人、諏訪と同じブラックスーツの男が付いている。
「では参りましょう」
諏訪は最初のコーナーに向かう間に注意事項を教えてくれた。
まず、展示品を乱暴に扱わないこと。そして展示品は『物』なので敬語は不要であること。

「こちらは展示コーナーでございます」
「わ……」
展示コーナー。そこには大きく足を開いた男の下半身があった。
「一番手前、こちらは『亀頭のみ』でございます」
腰から上は壁の奥なので見えないが、恐らく男は寝そべっているのだろう。手も壁の奥で、守るものもないまま急所を含む下半身だけを曝している。曲げた膝の部分と足首はベルトで固定されていて、きっと係の人に外してもらうまではこの姿勢のままなのだろう。
そして足の間、中心部分にはだらりと下がった陰嚢。その根元には小さめの亀頭があった。
「これ……」
「こちらは『亀頭のみ』、そのままの意味です。手術で茎部分を切除し、根元に亀頭を縫い付けております」
「すごい……」
茎部分を切除したペニス。亀頭しかないというそれは皮もなく、つるりとした亀頭だけを光らせていた。
（でも、怖くないのかな……）

こんな無防備な状態で――突然握られたり殴られたりしたらと思うと怖いだろう。壁があっては咄嗟に手を出すこともできない。いや、もしかしたらこちら側は見えてすらいないのかもしれない。
「あの、この壁ってマジックミラーみたいな感じですか」
「いえ、この展示物にはこちら側が見えておりません。突然触られるかもしれないという緊張と期待の中で過ごしております」
「え……」
期待、と言ったのか。触られる期待。
諏訪はふっと笑った。
「どうぞ。触ってみてください」
「え、いいんですか？」
だってここは展示コーナーだ。展示品は触ってはいけないもののような気がする。
「大丈夫ですよ。これがちゃんと本物かどうか、触れて確認してみてください」
「ありがとうございます」
剥き出しの亀頭。でも亀頭しかないので勃起しているのかどうかすら分からない。そっと手を伸ばす。ふに、という生々しい感触があった。
「わ……」
「いかがですか」
「本物です……すごい……」
ふに、ふに、と親指と人差し指でつまんでみる。柔らかい。でもちゃんと弾力もある。
「これ、今勃起してるんでしょうか」
「どうでしょう。この展示品は茎がないので本人にしか分かりませんが……いえ、きっと勃起しているでしょう」
「そうなんですか」
「少しだけ、尿道口が濡れてきているように見えますから」
「あ、ほんとだ……あの、もう少し触ってみてもいいですか」
「ええ、どうぞ」
もしかしたら、一人一人にこの黒服が付くのは展示品を乱暴に扱わないように見張るためなのかもしれない。
（僕はそんなことしないけど……）
でもきっと、中にはそんな人もいるのだろう。見えない状態で、誰かも分からない相手に突然ペニスを痛め付けられる――どんな気持ちなのだろう。少し興奮してしまうかもしれない。でも感じ方は人それぞれ。
そっと手を伸ばし、優しく亀頭に触れる。指先が亀頭に触れた瞬間、剥き出しの足がピクンと揺れた。
「ごめんね、驚いたね」
相手がいくつかは分からない。でも敬語は不要だと言われているので優しく話す。聞こえているかも分からないけれど。

「平野様はお優しいですね」
「え？」
「展示品は物ですので、話し掛ける方はあまりいらっしゃいません」
「あ……そっか……でも、可愛くて。僕ぬいぐるみとかにも話し掛けてしまうんです」
言った後で馬鹿にされるかな、と思ったけれど、諏訪は一瞬瞠目した後でふわりと優しい笑顔をくれた。
「やはりお優しいですね」
そのまま、満足するまで亀頭を撫でた。もちろん痛くないように、そっと指の腹で撫でるだけ。足は何度もビクンビクンと揺れていて、それが可愛くて。
どれだけそこにいても、諏訪は先に促そうとはしなかった。隣でずっと、満足するまで待っていてくれた。

「次は『亀頭なし』です」
「亀頭なし……」
さっきのは『亀頭のみ』だった。次は亀頭なし。一体どういうペニスなのだろう。
「こちらです」
二メートル隣にあった展示品。こちらも亀頭のみと同じく広げた足が固定されていた。
「手術で亀頭のみを切断しております。ただこの展示品は元々包茎で、亀頭がなくなった分更に余るようになりましたのでお手数ですが平野様ご自身で皮を剥いて中をご確認ください」
もう先程触ってもいいと教えてもらっていたので戸惑うことなくペニスに触れる。
（小さい……）
それは亀頭を切断したにしても小さめのペニスだった。
「小さいですね」
「はい。こちらが手術前の写真です」
「わ……すごい……小さい……」
展示品の横に置かれていたパネル。そこにはまるで動物園の動物紹介のようにペニスの写真があり、下に文字が書かれていた。
「ええと……」
【短小包茎ペニスのドM。元の長さは六センチ。亀頭切除後は四センチです】
「わぁ……」
実物を見るよりも何センチと書かれているとリアルに感じる。いやらしい。
「すごいです……小さい……」
皮を剥くと平らな断面が顔を出した。スパッと切られたのか平面になっている。少し丸みを帯びているようにも見えるけれど、真ん中の尿道口も剥き出しだった。
「単に切り落としただけなので、排尿の際は四方に飛んでしまうんです。そのため筒の中にペニスを入れた状態で排尿したり、出掛けるときはオムツをして出掛けるそうですよ」
「オムツ……」

すごい。健康な身体なのにオムツをして出掛けるなんて。
「あ、でも包茎だから飛ばないんじゃ……」
「あぁ……そうですね。剥かずに排泄すれば確かに問題ないかもしれません。今度展示品に伝えてみます」
「ありがとうございます」
自分の思いつきと発言で、この展示品の排尿方法が変わるかもしれないと思うと胸が高まる。その排尿を見てみたいな、とまで思ってしまうくらい。
「この展示品は、亀頭がないため射精に時間が掛かるんです。もう二度と亀頭責めはできないのですが、先端を撫でてやると亀頭を恋しく思って泣くんですよ」
「へぇ……可愛い……あの、僕も優しく撫でてみていいですか」
「はい、もちろんです。可愛がってやってください」
「ありがとうございます」
左手で剥いた皮を押さえ、右手のひらでそっと先端を包むようにして撫でる。すると諏訪の言った通り足がガクガクと揺れ始めた。
「可愛い……つらいのかな……気持ちいい？」
亀頭がないなんて一体どんな感覚なのだろう。会話ができたらいいのに、と思うけれど仕方がない。
「可愛い……すごく可愛いおちんちんだね」
見た目は普通ではない。けれど、すごく愛らしい形をしていた。手術は痛かっただろうな、怖かっただろうな――でもきっとすごく興奮したんだろうな、と展示品の背景を考えてしまう。
「平野様に可愛がっていただけて、展示品も悦んでおります」
「そうでしょうか」
「ええ。このように優しく撫でていただく経験はあまりありませんので」
「え……でも」
乱暴にしない、はルールだったはずだ。守らなくてはならない。
「ええ、暴力的な行為は当然禁止なのですが、もっと激しく撫でたり擦ったりしても、それは暴力的な行為にはなりませんから」
「あ……」
言葉遊びのようなものなのだろう。きっと禁止されているのは本格的な乱暴なのだ。殴るとか蹴るとか、そういう怪我に直結するようなもの。でも激しく擦ったり撫でたりしてもそれは愛撫のうちなので構わないということだろう。
「あの……」
「はい？」
「もう一度……亀頭のみのところに行ってもいいですか」
それならこの亀頭のないペニスより、亀頭のみのペニスを撫でたかった。
「もちろんでございます。ぜひ可愛がってやってください」
さぁではこちらへと自然に腰に添えられた諏訪の手。どきりとした。顔を見上げる。右斜め下から見る諏訪の顔は表情こそ分からないものの、とても整っていた。

「どうぞ。もし何かご入り用でしたらお申し付けください」
「何かって……なんですか？」
「ローションやガーゼ、ストッキング、歯ブラシ等、愛でていただくための道具は揃っております」

〜〜〜〜

「吸わせましょうか」
「え？」
「便器に吸わせることで排尿を促すことができます」
「あ……はい……」
でも、吸ってもらうなんて生々しい。それも精液ではなく尿をなんて。
「いかが致しましょう」
「……じゃあ……お願いします」
客なのだ。自分は客。諏訪は仕事。それだけ。それに今日ここから出ればもう二度と会うこともないのだ。今はきっと、この博物館の特異性と諏訪のカッコよさに気持ちが浮ついてしまっているだけ。
「ではもう少し身を屈めていただけますか」
「はい」
腰を落とし、軽く前屈みになる。すると便器の口に亀頭だけが入った。
「はい、結構です。吸われましたらそのままおしっこをしてください」
「はい……」
おしっこ。吸われたら。亀頭だけを吸われ、排尿――いやらしい言葉が頭の中をぐるぐると回る。下を見ると先端だけを咥えられた状態。そしてその根元を持つ諏訪の綺麗な手。
「あっ……」
すごく興奮する――そう思った瞬間、亀頭が吸われた。
「あああっ！」
気持ちいい。感じてしまう。勃起してしまう。
「あっ、ダメっ」
じゅううう――と亀頭が吸われている。尿を出せとせがまれているみたい。
「あっ……」
「平野様おしっこは出そうですか」
「やぁっ……出ないっ、起っちゃっ……」
「ではロオナホに戻りましょうか」
「……はい」
返事をした途端、吸引は止まった。
「大丈夫ですか」
「うぅ……」

すごく気持ち良かった。いやらしかった。視覚からの興奮も相まって、更に高まってしまった。
「……大丈夫です。よくあることですから。今度はどちらのロオナホに致しましょう」
「あ……」
そうだ。椅子に座って抜いてもらうか、自ら跨って腰を振るか。
「……寝ている方……」
「承知致しました」
顔の上に跨る――たった今その魅惑を知ってしまった。欲に抗えない。でも――。
「あの……諏訪さん」
「はい」
腰に手を添えられたままロオナホに向かう。
「僕……その、腰を振ったことがなくて……」
つまり、童貞だ。据え置き型のオナホすら使ったことがないのでどうしたらいいか全く分からない。でも顔を跨ぎたい。口にペニスを突っ込みたい。
「左様でございますか。ではお教え致します」
「ありがとうございます。宜しくお願いします……」
諏訪に手を引かれ、寝転んだロオナホの顔を跨ぐ。諏訪の持ったペニスが口に入った途端、唇が閉じた。
「あっ……すごい……」
舌がペニスに絡みついてくる。ぬるぬるした舌が動いて気持ちいい。
「ああっ……」
ダメ、動かなくても出てしまいそうだ。でも教わりたい。諏訪に腰の振り方を。そしたらこれから――実際に使うことはなくても、自分の腰振りは諏訪に教えてもらったのだと温かい思い出を胸に生きられる。
（大げさかな……）
でもこんなに好みの相手に出会ったのは初めてなのだ。もちろん優しいのは仕事だからと分かってはいるけれど――きっとホストに夢中になってしまう人はこんな気持ちなのだろう。
「ペニスが馴染むまで待ちましょう」
「はい……」
舌はずっと動き続けた。亀頭を撫で、優しく吸う。さっきの便器とは違った感触。あれは本当にただ、尿を促すための吸引だったのだ。でもこれは違う。ちゃんと高めようと動いている。
「あっ……んんっ」
「平野様はおちんちんへの刺激のご経験が少ないのでしょうか」
「あ……はい……あまり……」
恥ずかしい。でももう腰を振ったことがないという時点で未経験ということはバレているのだ。今更隠してもしょうがない。
「そうですか。では今、一生懸命新しい刺激を覚えようとしているのですね。いじらしい……」
「あ……」
まるでペニスを愛でるような言い方。更に興奮が高まる。

「おちんちんが口内の刺激に慣れてきたら少しずつ腰を動かしてみましょう。前後に、引いてから押し付ける感覚で」
「はい……」
そっと腰を引いてみる。けれどどれくらい引いたら分からずにいたら、そのままペニスはぽろりと落ちてしまった。
「あっ」
「大丈夫です。もう一度入れてみましょう」
また諏訪がペニスを持った。そして口内に入れてくれる。
「ンッ……」
「カリの辺りで腰を止めてみましょうか。カリまで来たら、今度は押し込んでみましょう」
「はい……」
意識をペニスに向けて、どこまで抜けているか考えながら腰を引く。
「ん……」
気持ちいいのに、抜けないようにと動きに集中しているせいで快感だけを追うことができない。もどかしい。早く脳を突き抜けるような快感がほしい。
「そうです……お上手ですね。では今度はぐっと押し込んでみましょう。こちらは勢いをつけて大丈夫です」
「はい……ああっ」
敏感な裏筋が舌のざらざらに擦られる。
（何これっ……すごい……）
窄められた口内がきゅうきゅうとペニスを締め付けている。それだけでもうおかしくなりそうなのに動きを止めると舌がペニスに絡みつく。
「ああ……」
もうこのままでいい。絶頂したい気持ちもあるけれど、ずっとこの緩やかな快感の中にいたい。
「お気に召していただけたようで嬉しいです。ごゆっくりお楽しみください」
諏訪がじっと見ている。恥ずかしい。下半身だけを丸出しにして男の口にペニスを突っ込んで感じている姿を、諏訪が。
「ぁ……恥ずかしっ……」
自分は何てことをしているのだろう。でも今の状態を客観的に見れば見るほど興奮が高まる。
「とても可愛らしいですよ。何も知らない男の子が初めての快感に戸惑いながらも感じている姿は本当に可愛らしいものです」
「ぁ……やぁ……」
そんな風に見られているのか。でも間違っていない。諏訪の言う通りだ。強すぎる刺激に戸惑いながら、それでも身体は浅ましく快感を求めている。
「あっ……んんっ……」
このまま気持ちいい中でふわふわしていたいのに、口オナホは先端を吸った。精をねだられている。

「あっ……ん、出したいっ」
どうやら自分は吸われることに弱いらしい。すぐに感じてしまう。
「ではまた腰を振ってみましょう。抜いて、挿して……」

〜〜〜〜

「あの、このミルキング体験というのは……」
「こちらは自動ミルキング装置を埋め込んだ展示品です。ボタンを押すだけでペニスから白濁が漏れ出ますので面白いですよ」
「わ！　見たいです」
「ではこちらへどうぞ」
案内された先にいたのはやはり下半身だけを壁から出した男の身体だった。大きく足を広げ、陰部を曝している。そしてその足の間にあるボタン。上には『ミルキング』とだけ書かれている。
「こちらのボタンを押していただくと、ペニスから搾精されたミルクが出て参ります」
「すごい……でもどうなってるんですか」
「精嚢の部分に膨張するバルーンを埋め込んでおります。ボタンを押すことでそのバルーンが膨らみ精嚢を圧迫することでミルキングを行います」
そんなこと、聞いたこともなかった。ミルキングは知っているけれど、自動で、なんて。
「あ、あれは？」
すぐにボタンを押してしまうのはもったいないなと周りを見ていると、両替機サイズの機械が置かれていることに気が付いた。「ミルキング用券売機」と書かれている。
「あの、チケット制ですか」
「あ、いえ、今日はご自由にお使いいただけます」
「え？」
何か事情があるのだろうか。首を傾げると諏訪は説明をしてくれた。
「こちらはミルキングですので、実行可能回数に限度がございます。ですので普段は券売機でチケットをご購入いただき――まぁ整理券のようなものですね。こちらをご購入できた方のみがミルキング体験をしていただけます。ですが本日は通常開館ではございませんのでお使いいただけるようになっております」
通常開館ではない――とは一体どういうことなのだろう。その疑問も、諏訪は感じ取ったようだった。
「本来当館はチケットご購入の上ご来館いただくのですが、本日ご来館いただいているのはこちらからご招待させていただいた方のみとなっております。そのため普段とはご来館くださる人数が違っておるのです」
「あ、そうなんですね……」
そういえば、どうして自分のところに届いたのだろう、と不思議に思っていたのだ。少し前に知り合いからこの博物館の存在を聞いてはいたけれど、まさか招待してもらえるとは――いや、そもそも本当に存在するとは思っていなかった。

「ですので、どうぞボタンを押してみてください」
「はい」
せっかくだし、確かに楽しんだ方がいい。それに自動ミルキングというのも見てみたかった。
一歩前に進みボタンに近付く。何の変哲もない普通のボタンだ。指先で押す。カチ、と音がした――瞬間、ビクンと拘束された展示品の足が揺れる。

〜〜〜〜

帰宅するとすぐにＤＶＤをデッキにセットした。電車に乗っている間も内容が気になって――いや、さっきの諏訪との時間さえも夢だったのではないかと思うほど心がふわふわしていた。その度に何度もＤＶＤに触れてその存在を確かめて、現実なのだと自分に言い聞かせた。
【おはようございます】
動画はタイトルや音楽もなく唐突に始まった。
可愛らしい外見の青年が、上背のある黒服と共に入ってくる。
【寒くありませんか】
【大丈夫です】
二人の奥に映っているのはどうやら展示コーナーのようだ。しかし今日見たのとは少し違う。でもすぐに気付いた。まだ、上半身と下半身を分ける壁がないのだ。だから奥行が広く見えている。
【脱ぎましょうね】
【はい】
黒服が青年の服を一枚一枚丁寧に脱がせていく。ドキドキした。千尋はネコで、男らしいタイプにしか惹かれないのに。なのに青年の陰部には手が加えられているのだろうと思うと早く見たくてたまらない。身を乗り出し、画面に目を凝らす。
【今日も可愛い】
【あん……】
さっきお風呂に入ったでしょ、なんて声が聞こえてくる。やはり二人は一緒に住んでいるのだ。
【こちらへ】
陰部にキスを落とした黒服が手を差し出し、二人で奥に向かっていく。それに合わせ、カメラも更にズームされた。
【あ、これ】
【乾きましたよ】
青年が敷かれた布に触れている。もしかしたらお気に入りのタオルやブランケットなのかもしれない。
【汚しちゃってごめんなさい】
【お漏らしするほど上手に感じられたんですから謝ることはありませんよ】
二人は敬語だけれどやはり親密らしい。目を合わせ微笑み合っている。それがすごく――羨ましい、と思った。

【体調は大丈夫ですか】
【はい。今日も一日宜しくお願いします】
【こちらこそ。ずっと傍におります。頑張りましょうね】
【はい】
青年が台の上に横たわった。足がこちらに向いているので表情は見えなくなってしまう。けれどその分、陰部は見やすくなる。
黒服が青年の足首を持って広げた。そして台の手前にあった足置きに両足を載せて、固定。これで青年はもう足を閉じることはできない。
黒服が青年の横に移動した。大写しになる陰部。青年のペニスがあるべき場所にあったのは、亀頭だった。千尋が気に入ってたくさん撫でた『亀頭のみ』だった。
「わ……この子だったんだ……」
いや、もしかしたら違うかもしれない。諏訪は勤務は週に三日だと言っていたからシフトで交代している可能性はある。だからこの青年ではなかったのかもしれない。でも、そっくりだった。
【枕の高さは大丈夫ですか】
【はい。毛布も気持ちいいです】
さっき敷かれてあったのは毛布だったのか。黒服が頷き、毛布の端を持って青年の身体に掛ける。
【ドキドキする……】
【大丈夫ですよ。何かあったらすぐにボタンを押してくださいね】
（ボタン――そうか）
排尿や何か不都合があったときはきっとボタンを押して黒服に伝えるのだ。でないと手すら表に出ていない状態で黒服に意思表示をすることはできない。
【本、置いておきますね】
【ありがとうございます】
何か置かれている。本と言ったし、きっと待ち時間に時間を潰すためのものだろう。
（そうだよなぁ……）
いつ触られるかは分からないけれど、触られない間は退屈だ。だからきっとこうして私物を持ち込むのだろう。中には携帯やゲームを持ち込む人もきっといるだろう。そう思うとちょっと気持ちが楽になる。弄られている間はつらいだろうが、待ち時間もある。それなのに二年働くだけで生涯賃金が稼げてしまうなんて。
画面の中、黒服が再び青年の足の間に移動した。
【精液を抜きますね】
【はい……んっ……ぁ……】
【今日も敏感ですね】
【やっ、んっ……】
きっとミルキングをしているのだろう。射精して客の服を汚さないように朝のうちに搾精すると諏訪が説明してくれたのを思い出す。

【あぁ……】
続いて聞こえた悲しそうな声。きっと仕事と分かっていても快感なく精液を抜かれてしまうというのはつらいのだろう。
【つらいですね……でも上手に出せてますよ】
【んっ……】
黒服はずっと優しかった。何度も青年の顔を窺い、確認しながら作業していた。そして声を掛け褒め続けている。
【出せました。おしっこはどうですか】
【今は大丈夫です】
【分かりました。では仕切りを下ろします】
【……さん】
名前は聞き取ることができなかった。けれど切なそうな声。
【……また後で。愛してます】
【僕も……】
黒服が青年の顔を覗き込み、そして身体を屈めた。きっとキスをしたのだろう。裸で、足を大きく開いて。今から不特定多数の相手に自分の身体を弄られる。しかもそのための説明をするのは愛する人――なんて切なくていやらしいのだろう。
「ぁ……」
気付けば勃起していた。今日二度も射精したと言うのに。恥ずかしい。こんなに性欲が強かっただろうか。
でも仕方ない。だって過去、こんなに興奮する動画を観たことはなかった。どんなに嵌ったオカズよりも興奮している。
抜きたい。触りたい。けれど続きも観たくて、もう少しだけ我慢することに決める。
一度画面が切り替わった。しかしアングルは変わらない。恐らく時間の経過で飛ばしたのだろう。
大きく開かれた足。その横に立っている黒服。そしてそこに中年の男性が現れた。
【ようこそ】
【ここは？】
【亀頭のみでございます】
【ほう……あぁ、すごいな】
【こちらの展示品は、陰茎の竿部分を切除し亀頭のみを根元に縫い付けております】
【感覚はあるのかな】
中年男性は腰を屈め、じっと近くから陰部を覗き込んでいる。
（すごい……あんな近くで……）
きっと、吐息が陰部に触れていることだろう。他人の吐息。それが分かるほど近くでじっと見られる快感。
「ぁっ……」

ペニスが疼く。もう触ってほしいと訴えている。けれどまだ触りたくない。もっと高めてから触りたい。
さっきは続きを観たいからと思っていたのに、すでに動画は立派なオカズと化していた。
【はい、ございます。術後しばらく――一年程は感覚がございませんでしたが、現在は手術前よりも更に敏感になっております】
【ほう……それはいいね。術後、感覚がないときはどうしてたのかな】
【日々泣いておりました】
ぞく、とした。日々泣いていた。きっとそれを黒服は慰め続けたのだろうが、一年もの間ペニスの感覚を得られないなんて。
【排尿はどうしてるの？　立ってできる？】
男は興味津々なのか、それともこうしてねっとりと眺めることで焦らしているのか、なかなか亀頭に触れようとはしない。
【立位での排泄は可能ですが、持てる部分がございませんので普段はオムツに排尿をしております】
（そっか……座ってもできないんだ……）
ペニスがある状態で便座に座って排尿しようとすると、それは当然足の間を通してペニスを押し、尿道口が下を向く状態にしなければならない。でも亀頭しかないペニスでは尿道口を下に向けることはできない。
【そう……いやらしいな。感度はいいのかな】
【抜群の感度でございます。もしよろしければお触りになってください】
黒服が何かを男性に手渡した。男はキャップを開け、指を入れている。
（ローション……かな）
諏訪には何も渡されなかったが、もしかしたら相手を見て渡しているのかもしれない。傷がつかないように、乾燥してそうなら渡すとか。
【……あぁ、ぷりっとしていてとてもいい手触りだな】
男が亀頭を撫でながらいった。足がびくんびくんと動いているのが生々しい。
【ありがとうございます】
【潮は出せるのかな】
【いえ、お召し物を汚してしまう可能性がございますので、射精や潮は出せないものとなっております】
【そうなの？　残念だなぁ】
【ご期待に沿えず申し訳ございません】
黒服は頭を下げたが、男は怒ってはいないようだった。いいよいいよ、と笑顔を見せている。
【本当に可愛い亀頭だね】
【ありがとうございます】
剥き出しの足はまだガクガクと揺れている。動きたいのに拘束されているので動けないのだろう。
【……うん、ありがとう。本当にとてもいい展示だった】
【ありがとうございます】
黒服がタオルを差し出すと男はそれで手を拭った。そしてポケットから何かを取り出し青年の上半身と

の仕切りに開いていたらしい穴からそれを入れた。
【ちょっとだけどね】
【ありがとうございます。喜びます】
チップだ、とすぐに分かった。すごい。内側に落ちたお金は青年の目にも入るだろう。それはきっとやる気に繋がっていく。
黒服が男に頭を下げながら見送り、それから頭を上げた。そしてすぐに青年の足の間に身体を入れる。取り出したのはタオルだ。きっとローションを拭くのだろう。
（でもそれって……）
どんな感じなのだろう。射精したいのにできなくて、でも気持ち良くて。知らぬ男につけられたローションを恋人に綺麗にしてもらう。きっと感じてしまうだろう。タオルで擦られ、その後でローションが残っていないか指で触れて確認をされる。もしローションが残っているようならまた拭かれて、そして確認——綺麗になるまでその繰り返し。
もし自分だったら——剥き出しで敏感な亀頭はきっとタオルに擦れるだけでピクピクしてしまう。
【頑張りましたね】
青年の声は聞こえない。防音なのか、そうでないのか。少なくとも千尋が先程弄ったときは展示物の声は一切聞こえなかった。
（もし防音なら寂しいな……）
せめて、諏訪が自分の身体を説明しているのくらいは聞きたい。それに、自分の身体を知らない男に勧めるのも。
（ぁっ……）
下着が冷たい。このままだとたくさん汚してしまう。でも続きも気になるし何よりもっともっと限界まで——それこそ暴発してしまうくらいまで興奮を高めたい。
（もうちょっと……）
もうちょっと我慢しよう。せめてこの動画が終わるまで。最後まで観たら一番興奮したところをもう一度観返しながら抜こう——そう決めて、でも汚れないようにとズボンと下着は脱ぎ捨てる。
（さっきと同じ格好……）
諏訪に脱がせてもらったときも同じ格好だった。上衣だけを身につけ下は丸裸。この恰好で腰を振った。男の口の中にペニスを入れ、諏訪に教わりながら。
（ううう……）
ダメだ、扱きたい。擦りたい。ペニスはまださっきのロオナホの感覚を覚えている。当然諏訪にペニスを持たれる感触だって。
（でもっ……）
【お疲れ様でした】
聞こえた声に顔を上げる。画面の中、どうやら時間が進んだようで仕切りが開いていた。
【……さん……】
【……疲れましたね】

【ん……だっこ……】

青年の様子は出勤時とがらりと変わっていた。きっとかなり精神的にも体力的にも疲れたのだろう。可愛らしく黒服に甘えている。それに黒服も嬉しそうだ。青年が寝ていた台に座り、膝の上に青年を乗せている。

【よく頑張りましたね。さあおちんちんを見せて】

約5万文字。全部ハイライトです。

gooneone